第二節　指導方法･教育環境

第三項　構造化の実際

1.　自閉症教育のキーワード「構造化」

従来から自閉症教育において，構造化は，有効な教育方法として重視されてきたようです。実際に自閉症教育に携わった経験のある方は，黒板に，一週間，一日のスケジュールを書き出したり（時間の構造化），学習する場所と食事する場所を分けたり（物理的な構造化），一人で作業ができるような机の配置や作業の手順を示すなどの工夫をしたり（活動の構造化）した経験もあるかもしれません。これらは全て「構造化」と呼ばれるものです。

TEACCHプログラムが日本に紹介されてからは，具体的な「構造化」の理論と方法が紹介され，教育現場における実践も増えています。構造化に関して基礎から学びたい方は，文末に示した文献を参考にしてください。ここでは人の位置や現在の学校等で行われている物理的な「構造化」を中心に考えてみたいと思います。

イメージしやすいように，新学期からの時間の流れでポイントを示してみます。

2.　学校が好きになるように,できるだけ分かりやすい環境を整備して,不安や混乱を取り除く

入学時はもとより，教室や担任が替わることは，自閉症のある子どもたちにとっては，混乱を招くことすらある重要な問題です。自閉症の特性として，聴覚よりも視覚優位の人が多いことはよく知られていますが，セントラルコヒーレンス【Central Coherence（中心的首尾一貫性）：全体的な意味合いを把握することが困難である】に対しても合わせて考える必要があります。つまり，絵カードを作るなど，分かりやすい環境を用意するだけではなく，活動の流れをつかみ，関連性を把握しやすい環境を作ることが必要です。そこで，入学時は，場所の一対一対応，ルーティンの利用のための活動の精選，短い時間での活動の展開等を心掛ける必要があると考えています。

入　学　時	
場所の一対一対応 （物理的な構造化）	朝の会や帰りの会などの集団の場，着替え，一人で学習，先生と学習，昼食などの活動の場所を分け，活動と場所を対応させる
ルーティンの利用のための活動の精選 （時間の構造化）	事前によく話し合って，これから何か月も継続して行う活動の大まかな流れを決めておく。特に，登校後すぐに何をするのか，給食の前後の活動は何か，下校時間は一定かなど。最初はできる限り帯状の時間割を組んだ方が良い。
短時間，短いサイクルでの活動の展開 （活動の構造化）	これが示されたら何をするのか，どうするのか，終わったら何をするのかを明確に示して，できたら必ずほめる。どのくらい見通しがもてて，どんなほめられ方が好きなのかは，それぞれ違うので，最初は短時間，短いサイクルで何度も活動を展開できるようにすると実態把握が進む。

最近は，療育機関で物理的な構造化が行われていたり，入学までにコミュニケーションカードを利用していたりする子どもたちもいます。当然のことですが，しっかり引継をして，過去の支援の蓄積を活かし，一貫性と継続性を図ることが，新しい環境に最も移行しやすい方策です。

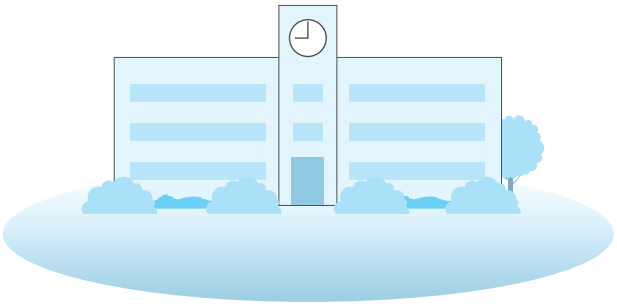
また，最初から衝立の配置やスケジュールボードが固定された教室を見ることがあります。物理的な構造化をベースにして，実践を進めることはとても大切なことです。しかし，子どもたちの実態に合致するものは改めて作り上げていくことを確認したいと思います。最初の衝立やスケジュールは十中八九，変化します。4月，5月は棚や衝立をいつでも動かす心構えを忘れずに，写真や絵カードにラミネートを被せるのは後にします。

3.　学校での構造化は学びやすくするためのもの，常になぜ構造化するのかを考えて

構造化には画一化されたものは存在しません。構造化と表裏一体のキーワードは「個に応じた工夫」です。構造化が，地下鉄などの表示に例えられることも多いことから，矛盾していると感じるかもしれません。もちろん，バリアフリーのような万人に通じる構造化もありますが，教育の場で使う構造化は個別化されたものです。できる限り目の前にいる子どもたち一人一人にとって役に立つ「オーダーメイドの構造化」を見つけることが大切です。個別化の視点がないと，発達途上にある子どもたちを構造化に慣らすことになってしまい，学校での構造化の本来の意味－学ぶための手段としての役割－を違えてしまうことになりかねません。学校での構造化は，人から学び，自ら学び，人に尋ね，自分で判断する等の力をつけるための手段です。

では，どのようにオーダーメイドの構造化を進めるかです。その鍵は内容にあります。生活を送る上で本当に必要な状況（登下校に公共の交通機関を利用したり，大好きなものを買ったりする）での実践がホームページ等で数多く紹介されていますが，それらはどれも，オーダーメイドの構造化の実践例といえます。学校においても教育内容を精選し，「この内容は，この子にとって本当に必要な教育内容である」という確信をもてる内容をしっかり用意することが，よりよい構造化を考えるにあたって大きな柱となります。

構造化に関しては，例えば一学期中は，以下のことを心掛けます。



できる限り客観的な評価をする

標準化された評価をする（PEP-Rなどの自閉症の特性に応じたアセスメント）。コミュニケーションや社会性などの評価をする。

▼

一人一人のものの見方・捉え方（認知の仕方）を把握する

日常の行動観察などから，どんな場合に気が散りやすかったり，ものにこだわりがあったり，触覚などの感覚に特徴があったりすることを把握するようにします。文字が分かる子であっても，ひらがなと漢字のどちらが分かりやすいのかまでとらえるように努力してみます。

▼

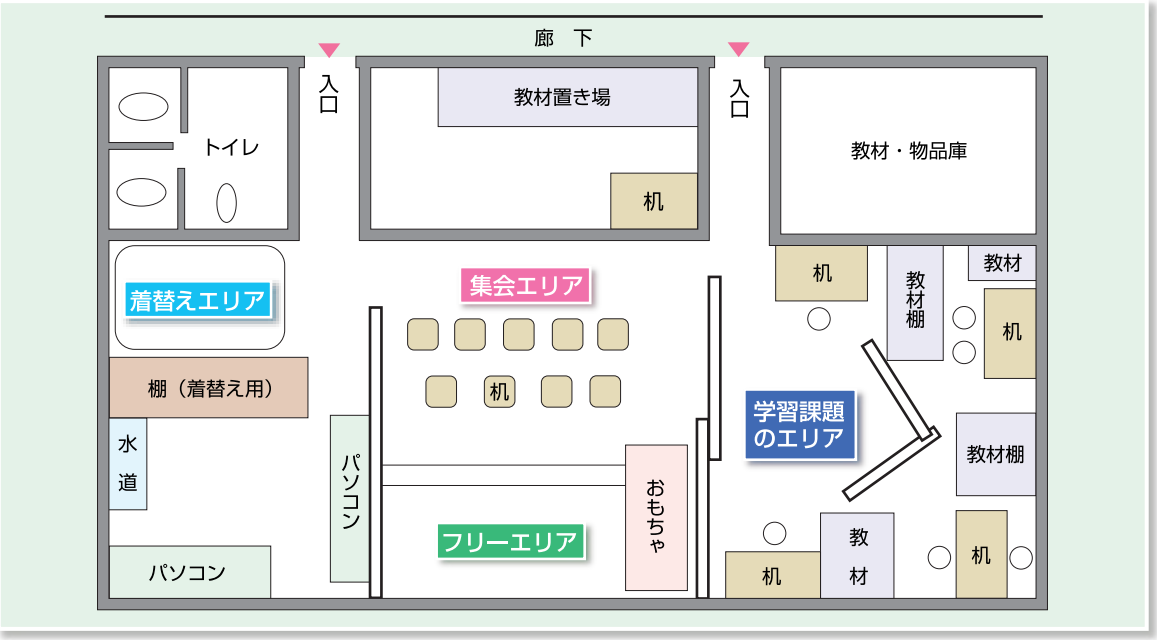
教育内容を厳選した上で一人一人の構造化を考える

対象の子どもにとって必要な内容を準備します。内容がその子にとって合っていなかったり，必要なことではなかったりするなら，本末転倒です。内容を厳選し終えたら，客観的な評価等によって得られた認知の仕方に配慮して，できる限りオーダーメイドの構造化を実現するようにします。集団の場面でも，一人一人の実態に即して，構造化する目的をはっきりさせてから取り組む必要があります。

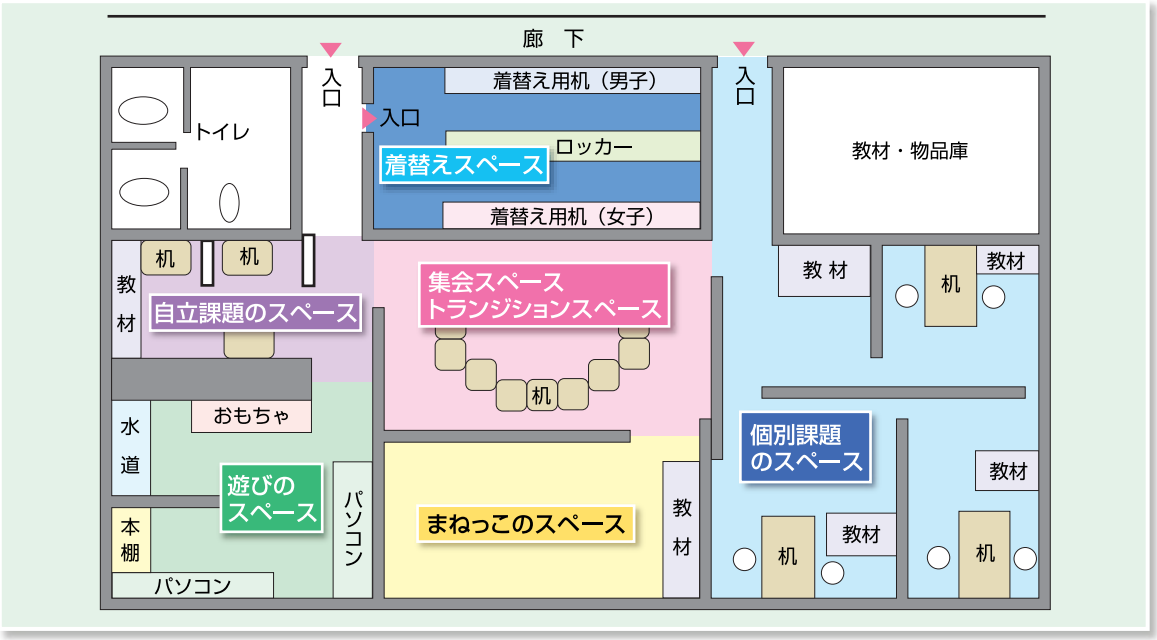
第二節　指導方法・教育環境

国立久里浜養護学校で実際に行われたものをいくつか紹介します。皆さんの学校の実践でも行われているものもあるはずです。オーダーメイドの構造化に近づけようと実践を進めていった結果，空間（スペース）全体を，明確に分けた教育環境の構成になりました。

国立久里浜養護学校の構造化の例（教室）2003年4月当初



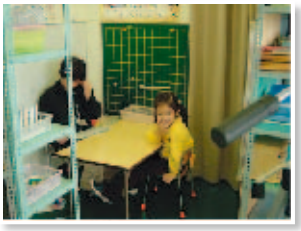
国立久里浜養護学校の構造化の例（教室）2004年2月



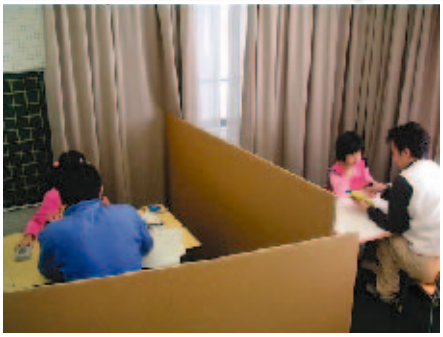
4.　自分で活動する経験と，人から学ぶことのバランスを個々に応じて

次に構造化をどのように利用するかの具体例です。国立久里浜養護学校で実践を進めた結果，ワークシステム*を用いて自立課題を中心に行う自分で活動する場面と，基本的に教師と一対一で人から学ぶ場面では，このように違いました。

＊ワークシステム；何をするのか，どうするのか，どうすれば終わるのか（終わったら報告をする），終わったら何をするのかを明確に示して，自立的に活動するためのシステムのこと。



個別課題の部屋



自立課題の部屋

	個別課題の部屋	自立課題の部屋
＜相　違　点＞		
課題の内容	初めての課題，まだ一人ではできない課題（教師が臨機応変に課題の難易度を調整）	数回，個別課題で行った課題，一人でできる課題 （実態に合わせて複数の課題をする）
子どもの向き	基本的に教師とのやりとりをする課題学習場面では，壁を背にして適当に状況を把握できるようにした方が集中することができる。	基本的には自分の力で課題に取り組むために，集中しやすいよう壁に向かって活動する。
衝立の高さ	目線の高さ（教師は目線より下）	目線より上の高さ
コミュニケーション（報告）の方法	やりとりを重視する場面であることから，声の出るトーキングエイドなど，音声言語を利用して知らせるものを利用する。	自立的に活動する課題であることから，「できました」の文字カードなど，携帯して知らせに行けるものを利用する。

	個別課題の部屋	自立課題の部屋
＜共　通　点＞		
刺激の統制	課題に集中できるように，その子にとって刺激となるものはできる限り排除する。	
遮　　光	太陽の光は，気が散ることが多いため，学習の際は遮光する。	
活動の提示	何をするのか，どうするのか，どのくらいするのか，終わったら何をするのかを明確に示して，できたら必ずほめる。	
課題の提示	作業しやすいように，広めの机を用意する。机の上には１サイクルで行う課題，コミュニケーションツールなどを置き，余計なものは置かない。	

5.　構造化は無くならない，将来も活用するもの

これまでも少し触れましたが，構造化を考える上で，もう一つ重要なことは，地域での活用や，将来に向けた視点です。オーダーメイドの構造化は，子どもたちの豊かな生活を保障する上で，非常に役に立ちます。特に自閉症のある子どもたちにとっての構造化は変化するものであり，無くなるものではないと考えています。オーダーメイドの構造化は，その名のとおり子ども自身がとても便利に活用できる大切な財産になります。オーダーメイドの構造化を目指すことは，引き継ぎや生活場面への利用を自然に可能にするのです。

皆さんも是非，子どもたちの豊かな生活の実現に向けたオーダーメイドの構造化にチャレンジしてみてください。

個別のスケジュール（共通のものからオーダーメイドへ）

もう一度，確認です。

学校での「構造化」は，児童生徒が学びやすくするためのもの。
学びやすい「構造化」は，今の生活や将来の生活にも使えるオーダーメイドの構造化につながっていく。

参考文献

朝日新聞厚生文化事業団（1999）自閉症のひとたちへの援助システム.朝日新聞厚生文化事業団.

佐々木正美（2002）自閉症のＴＥＡＣＣＨ実践.岩崎学術出版社.

坂井聡（2002）コミュニケーションのための10のアイディア．エンパワメント研究所.

佐久間栄一・奥政治・永田努・沼澤聡子・本井健太（2004）自閉症の児童の特性に応じた教育支援の在り方に関する研究開発－個別の課題学習を中心とした指導パッケージの作成等を通じて－．教育実践研究報告（21），国立久里浜養護学校.

国立特殊教育総合研究所文献

国立特殊教育総合研究所（1988）自閉を伴う精神薄弱児の指導内容・方法に関する研究．国立特殊教育総合研究所特別研究報告書.

東條吉邦（2003）「自閉症児･ADHD児における社会的障害の特徴と教育的支援に関する研究」報告書．自閉症とADHDの子どもたちへの教育支援とアセスメント．科学研究費報告書.